
狂犬王子にお仕えしています。

河の上リン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂犬王子にお仕えしています。

【Nコード】

N5749Z

【作者名】

河の上リン

【あらすじ】

突然見ず知らずの男たちに拉致されて、気づけばガルダム国の第6王子、ゼイル様にお仕えすることになったあたし。

この王子、世間では、病弱で滅多に国政に顔を見せない麗しの幻影王子として名高いんだけど、実は国王直属の秘密組織『狂犬』の若きリーダー。しかもDSで最凶最悪の魔王みたいな男だったのだ。なんでか分からないけど気に入られたあたしは、王子付き専属メイド兼狂犬のメンバーとして、日々奮闘する羽目に…。

ワニ池での攻防（前書き）

思いつきではじめました。どうなるか分かりませんが、よかったら見てやってください。

ワニ池での攻防

神様。一つお尋ねします。

もしもこの世界に本当にあなたがいるのなら。

私は一体どんな罪を犯したのでしょうか。

教えてください。

どうして、私にこんな試練をおあたえになるのか。

どうして私はあんな、あんなドS王子の部下になったのでしょうか
…。

っていうか、あたしに何の恨みがあるんですか!?!?!?!

あたしは神様への呪いの言葉を胸に刻みながら、必死に逃げ回る。
ここは水の中。後ろにはぱっくり口を開けたワニ。
そして極め付け。

あたしは泳げない。

「いやあああああ——————っ！！！！！！」

なんで、なんであいつら、陸の上では人の足には敵わないのに、水の中だとあんなに早いんだ！！！！ものすごいスピードで、あたしを平らげようと常にお口は準備万端状態。

そしてあたしはまさかの難易度高い着衣水泳。かといってここで泳げないからといって諦めれば、あたしの末路は溺れたところをワニに食べられるか、もしくは溺れる前にワニのおなかの中かどちらかだ。

「もお——いや！！こんなくしょう！！！！」

だから必死で手も足も体全体も使ってがむしゃらに逃げ惑う。しかし、本当に呪いたいのはこの状況でも、ワニでも、実は神様でもない。

「おいテイ！！逃げ回ってないで、さっさと例のブツ探せ」

池のふちで優雅にタバコなんぞ吸っている、あの最低最悪男だ！！

あいつ、泳げないと知っていながらあたしを池にたたき落とし（しかもワニがいるって知ってるくせに）、あまつさえ池のどこかにあると思われるある証拠品を取って来いって命令したのだ。

「ちよ、ゼイル様、無理ですって無理無理無理…わっぷ」

勢い余って水が喉の奥まで入り込む。が、そんなあたしのある意味命を懸けた訴えにも、彼は耳を貸してはくれなかった。

「無理？んな言葉、俺の辞書には載ってねえから」

じゃああんたがやれ！！なんて言えないあたし…。彼の下についてもう長いこと経つけど。あの鬼畜で悪魔みたいな男は、決して助けはくれない。ならば、自分の命は自分で守るしかない！

幸い水での動きもつかめてきたので、あたしは拙い泳ぎをしながら必死に打開策を考える。

問題はあのワニだ。あいつさえいなくなれば、まだ勝算はある。

あたしは犬かきをしながら辺りを見渡す。個人の所有する池にしては広い方で、綺麗な睡蓮も浮いていれば水草も漂い、飛び石なんかもおいてある風情な作りだ。それを見たあたしはふと、あることを思いついた。

ふむ、いけるかもしれない。

あたしはその中でも一番大きな石に目を付ける。あれをあれしてあれすればあれにならないだろうか。ええい、考えてる暇はない！あたしはスピードをあげると、囲めばあたしの腕、ふたまわり分はありそうなその岩をを目指す。

そしてなんとかそこまで辿り着くとその石にしがみついた。それから乱れた呼吸と疲労した表情をあえて顔に張り付け、ワニの方を見た。

彼（彼女かもしれないけど）は疲れ切ったあたしを見てわずかにほくそ笑む（かどうかは分かんないけど、少なくともそんな風にあたしは見えた）と、スピードを落とし、ゆっくりと近づいてくる。あたしはそこから動かない。ワニの目がきらりと光った。

その姿はもろに、弱っている獲物をじわりと追い詰める肉食動物そのもの。ようやくご飯にありつける…そんな彼の思いが伝わってくる。

そしてそのままの速度でぐんぐんやってきて、大きく開いた口を更に大きく広げ、あたしの体ごと丸のみにしようと覆いかぶさって…今だ！その瞬間、あたしは電光石火の速さで石から離れる。

直後、ガリツという固い音が辺りに響いた。間一髪、あたしはワニの恐怖の一口から逃れる。あの音から察するに…見ると、ワニが岩を食べている状態。

「ふう、よかった成功した」

もちろん、そうなるように仕向けたんだけど。あたしを丸のみしようと限界まで口をあけて襲い掛かり、案の定あのワニ、岩が喉まではいりこんで抜けないらしい。頑張ってジタバタしてるけど、びくともしない。顎も外れてそうだ。

この隙にとあたしは腰にさした刃物を鞘ごと引っこ抜く。刃は出さない。あの長官と違って罪もない生き物を叩き斬る趣味はないし。ではどうするかというと。あたしは水中で必死に足をもがかせながら鞘を付けたままワニの方に近寄ると、その無防備な頭に思いっきり手にしたそれを叩きつけた。

「どりゃ————！！！！」

鈍い音がして。見事にヒットしたあたしの武器で頭をやられたワニは、そのままの格好で気絶する。

「…………とりあえず、助かった」

ほんと、九死に一生ってこのことなんじゃないのかな、うん。

さて。それで本題はここからだ。あたしはこの水の中で、あるブツを見つけないとならない。早くしないとワニが起きちゃうし、かといって上司は…あ、茶飲んでる。

絶対手伝ってくれる気皆無だ。分かったことだけど。

あたしは手にした武器を腰に差そうと（またワニが襲って来た時ように持つかないと不安だ）…つもりがささらず、そのまま落下していくあたしの武器。

「!?! やば」

慌てて水に顔を付けるとあとを追う。重みでどんどん下まで落ちて行き、ついには最下部に辿り着いた。水は綺麗だから視界もよく、すぐに落とした刀を見つけることができた。そんなに深くなくてよかった。

今度はきちんと腰にしまうと、あたしは上に上がろうと…ん？

目の前にはあのワニがくつついている石。その石の一番下に、なにやら怪しげな物体がくくりつけられている。明らかに人工物だ。急いで近づくと、縛ってあった紐を刀で切る。

それは長方形の真っ黒な箱、だった。

これは…もしかしてもしかなくとも、あれなんじゃないのか？必

死に探し求めていた、例のブツ。そんなに重くないので、あたしはそれを手にしたまま上に上がる。荷物を抱え、短期間でマスターした犬かきを駆使し、そしての男のところに戻ると、どすんと彼の足もとにそれを置いた。

「王子、おそらくこれじゃないでしょうか？」

うー、しかし寒い。水の中にいたらそうでもなかったけど、陸に上がると風が身にしみる。だって季節は10月も終わり。秋風がビュービュー吹き荒れる頃合いだ。寒さに凍えながらあたしが着ていた服を絞っていると、なんともおもしろくなさそうな顔で御仁がぼやいた。

「なんだ、もう見つけたのか。つまんねえな」

「いや、なんでつまらないんですか。っていうかあれ以上あそこにいたら、あたし生きて戻れないですって」

「慈悲で助けたワニが復活して、もう一ラウンドって思ったんだがな」

そう言ってクククともろ悪人顔で笑う。なんだその笑い、完全に黒い笑み……って以前に、全く王子っぽくないんですけど。

「あたしを殺す気ですか!？」

「大丈夫だ。いざとなれば助けに行ったださ。多分」

「多分って絶対その気ないですよね……ってそれよりどうします?これカギ付いてますけど」

薄情な王子のことはひとまずおいといて。あたしが命がけで持ってきたこいつには、頑丈そうかつ複雑そうな鍵が二つも付いている。しかし王子は何ともなしにしれっと言い放った。

「え、もう開けたけど」

そして彼がカギを持ちあげた瞬間、パーンと鍵がはじけ飛んだ。

「はや!？」

なんだその早開けの技術。一介の王子が、強盗でも生業にしてたんですかってくらいの腕前だ。

「お前がちんたら陸に上がってる間にとうに壊した」

その手には細長い針金。成程、ピッキングか。仕事が早いことで。

「さて、それじゃあ中身を拝見するか」

もはやただの箱と化したそれを、王子は乱暴にばんと開け放った。あたしも興味シンシンで覗きこむ。すると中には：

「やっぱりな」

そこのは、あたしたちが探し求めていたものと、そしてなぜか大量の女物の下着が入っていたのだった。

ワニ事件報告…(1) (前書き)

時代背景とかはごちゃごちゃですが、あんまり気にしないでください…

ワニ事件報告…(1)

「それで、あの男は自白したのか？」

ここは、ガルダム王国のサイド城最上部にある、とあるお部屋。中は豪華絢爛で、西国から渡って来た装飾品やら置物で彩られている。そんなお部屋の、大きな窓の前に。

大きな長机に両手を組み、あたしたちを見つめる一人のお方の姿があった。

険しい顔つきであたしたちを見据える彼こそ、この強大で巨大なガルダム王国のピラミッドの頂点に君臨する、ザイレン王である。

彼は一昨日起こった『ドミンゴ伯爵麻薬所持容疑』（別名…ワニ事件）の報告に來たあたしたちの話を黙って聞いた後、そう言った。

するとあたしの前に立つゼイル王子はにやりと笑みを浮かべながら言い放った。

「ええ、もちろん。ぺらぺら全部話してくれてますよ。あれじゃあ黒幕に辿り着くのも時間の問題かと」

すると、歴代の王の中でも一番嚴格だとして知られるあの王様の顔に、珍しく笑みが浮かんだ。

「さすがは『黒い狂犬』。狙った獲物は逃がさないな。一体どんな手を使って、自分の非を認めようとしなかった頑固者を口説き落としました？」

「いやいや、それほどでも。俺は何もしちゃいないですよ。あの男が自発的に、勝手にしゃべってくれてるだけですから」

しれっとそう言う王子に、あたしは思わずツツコミをいれそうになる。

：世間ではあれを、脅迫と呼ぶんですよ、と。

まあそれにしたって、ゼイル王子の取り調べは見事だった。

麻薬を購入している疑いの掛けられた、ドミngo伯爵。しかしその実際のブツが彼の屋敷で押収されて尚、しらをきり、自分の罪を決して認めようとしなかった。そんな彼のいる部屋にやって来たゼイル王子。

あきらかに堅気でない雰囲気をつんぷんさせ、くわえ煙草で入って来た彼は伯爵の正面に座ると、開口一番こう切り出した。

「お前の庭の池から、ブツが押収された。いい加減罪を認めたらどうだ」

しかし当の伯爵は顔をぶいと不愉快そうにそむけると、

「ふん！それがどうした。わしの屋敷にあったからといって、それがわしの者とは限るまい。屋敷で働くメイドや庭師の可能性もあるだろうよ」

なんでメイドや庭師があんな危険極まりないワニ池に、麻薬なんて隠す。んな命の危険犯さなかったって、別の選択肢があるだろうが。

「だがあの池にはワニがいた。あんたにしかなくない、非常に凶暴なワニだ。そんなところに果たしてお前以外の者が隠せるか？」
「そんなことわしの知ったことではないわい！！現に隠せているではないか。わしではないがな」

こうやって、わしじゃないの一点張り。さすがにあたしたちもお手上げ状態だったんだけど…。

すると王子はふうと息を吐くと、こういう場ではあまり見せたことのない、柔らかな微笑みを浮かべて伯爵を見た。

そして次の瞬間、彼の口からとんでもない言葉が飛び出した。

「分かりました。ではお帰りいただいて結構です」

「!?!?!?!」

え、いや、だって、どう考えたってこのおっさんが犯人じゃない！？
なのに本人が認めていないからといって、あっさり逃がしちゃうの!?!?

脇で見ていたあたしは慌てふためくけど、王子は全く動じず笑顔のまままだ。

当の伯爵もこの発言に少し驚いたのか（自分で無実だって言い張ってたくせに）戸惑いの顔を見せていたけど、彼の言葉が本物と分かると鼻息荒くふん、と言った後その場から立ち上がった。

「分かればいいんじゃない、分かれば。じゃあわしは本当に帰るからな」

「ええどうぞ。お気をつけて」

そして伯爵が足を踏み出そうとした瞬間、王子は「ああそう言えば」と言葉を切りだした。

「昨日見つかった箱の中には、麻薬のほかに女性用の下着がいくつも見つかった。しかもどれも使用済み」

「……!？」

「人の趣味にとにかく言うつもりはないが、まさか天下のドミngo伯爵が下着泥棒的な趣味をお持ちだったとは驚きです」

「待て、わたしにはそんな趣味はないぞ？」

「失礼。では自分でつけて楽しむ性癖をお持ちだったとは」

「黙れ、どっちも違うと言っているだろう!! おのれ若造の分際でわたしに意見するつもりか!？」

顔を紅潮させてゼイル王子の胸元を掴む。あたしが止めに入ろうとすると、王子はそれを手で制した。それからなんともない口調で言葉続ける。

「いえそんな滅相もない。まあ別に伯爵にそんな趣味があろうと罪になる訳じゃないし、今回の事件にもなんら関係がない。ただ、伯爵にそんな趣味があると、俺もどこかでぼろっと言ってしまいかもしれない。例えば行きつけの花街のなじみの女とか。近くの茶屋で働く女の子とかに。そして人の噂話とは早いもの。いくらこっちが口止めしても必ず外部に漏れる。しかもはじめより大きくなって世間に広まると言うのが世の常」

「違うと言っているだろうが!! わしが誰だか分かって言ってるんだろうな!?! もしもそんなことをしてみろ!! ただじゃおかいからな!!！」

しかし全く臆す様子なく、ゼイル王子はひよいと肩をすくめた。

「どうぞお好きに。だがいくら俺に報復したところで噂が消えることはない。下着を付ける、もしくは盗む趣味がある変態親父、っていう噂があった事実は消えないし、これから先一生変態呼ばわりされるんじゃないのか？」

「ぐぬぬぬぬ」

「俺には耐えられないね。世間に変態のレッテルを貼られて生きて行くのは。白い目で見られえて、後ろ指さされて、あーあ、かわいそうに!!」

「……」

「麻葉をやって捕まりました、っていうのと、そういう変態的趣味の男……。おいテイ。お前ならどっちが嫌か？」

唐突に話を振られて、あたしは思わず体をびくつとさせる。え、えと、どっちが嫌かって？ うーん、麻葉をしているっていうのは犯罪だし、もちろん許されないことなんだけど。でも正直、

「生理的に受け付けないのは後者です」

瞬間、伯爵の目がかっと大きく見開かれる。驚愕、ショックっていう感じ。反面、王子は目であたしに、「よく言った」って言っている感じがする。

それからゼイル王子は、再びにっこり笑った。さっきと同じ優しい顔。いやでも、違う。これはいい笑顔だ。

他人を追い詰めたときに見せる、有無を言わさない裏ありまくりの、いつもの王子らしい邪悪な微笑みだった。

「お引き留めしてしまって失礼。どうぞお引き取りください」

その瞬間、伯爵は手に入れていた力を抜き、その場にへなへなと崩れ落ちた。

伯爵が全てをぶちまける方を選んだのは、当然である。

つまり、自分の変態的性癖を世間に公表しない代わりに、麻薬のこととは認め、知っていることは全て話すと。

しかし正直あんな取り調べ、彼にしかできないことだと思う。あの脅迫のやり方は、本当にすごかった。確実に相手を追い詰める手法は、さすが狂犬のトップ。

あたしはあの時思ったもん。この男、絶対に敵に回したくないって。

ワニ事件報告…(2)

「しかしこれで事は進展しそうだな。お前のおかげだ」

「お褒めいただき光栄です」

すると王様は、今度はあたしの方に向き直ると、

「ゼイルに聞いたぞ。今回、よく頑張ったそうじゃないか。なんでもワニのいる危険な池に自ら飛び込み、証拠品を探し出したとか」

「!? は、はい」

自ら、って部分はまったくもって違うけど（かといって訂正しにくいし）、それ以外は大体当たっている（っていうか、有無を言わせない圧力に負けたただけだけど…）。

すると国王はにこりと笑いかけた。

「その勇気は、素晴らしい！お前のような者がいて私は誇りに思う。これからも全力を尽くして頑張ってほしい」

「あ、あ、ありがとうございます！！若輩ですが、頑張ります！！」

まさか、まさか王様直々にお褒めの言葉をいただくなんて…!?こんなこと、滅多にあるもんじゃない！！あん時頑張ってよかった！あたしはその場で床につきそうな勢いで頭を下げる。

「この一件、引き続きゼイルに任せる。必ず黒幕を突き止めるんだ」「了解しました。必ず」

あたしたちは佇まいをただし、敬礼をする。そうだ、これで事件は

終わりじゃない。目的は、あの麻薬をばらまいた張本人を捕まえることなんだから。

王様からありがたいお言葉をいただいたあたしたちは、失礼します、と頭を下げ、部屋を出る時に再び礼をしてから扉をぱたんと閉じた。

すると。その瞬間、ゼイル王子の纏う雰囲気さがらりと変わった。

さっきまでは、触れれば切れそうな鋭い、それでいて邪悪さを漂わせるオーラで、ニヒルな笑いか浮かべていた完全に悪役のボス、みたいだったのに。

今あたしの目の前にいるそのお姿は、まるで真逆だ。

もともととお美しいその顔には柔和な笑みを浮かべ、どこことなく儚げでかわい、それでいて繊細さも持ち合わせたその姿は、まぎれもなく国民に愛されてやまない『ゼイル王子（営業用）』だった。

「相変わらずその切り替えの早さ…すごいを通り越して気持ち悪いです」

「酷いことを言うな。…お前、後でシメル」

「いやいやいやそんな、嘘ですすみませんごめんなさい！！！」

やば、つい本音で気持ち悪いって言ってしまった！？あたしは機嫌をやや損ねてしまった主に慌てて頭を下げる。すると王子はにっこりと笑って

「冗談だから気にするな」

その瞬間、あたしたちの横をうっとりとした表情でメイドが通り過

ぎた。彼女がいなくなり、廊下に元の静けさが戻るや否や、その笑顔のまま小さな声で、どすをきかせてゼイル王子が呟いた。

「もういっぺんワニ池に沈めるぞ」

「!?!」

そう言い残して、ぶるぶる恐怖に震えているあたしをおいてさっさと先に進んでいく。

「あ、待ってください!!」

おいて行かれる訳にはいかない。あたしはあの王子の王子付き従者なんだから!!

慌ててあたしは主の後を追って駆け足でついていった。

拉致された(1) (前書き)

そもそもの出会いの話。

拉致された(1)

あたし、ことテスタロッサがゼイル王子に出会ったのは、今から1年前のことである。

場所はあたしのような庶民には一生足を踏み入れる機会がないはずの、白亜城と全世界的に名高い、ガルダムのお城のとある一室だった。

「ふぬぬぬんうぬぬ——！！！！！！」

叫べば叫ぶほど、口が閉まる。苦しい。だけどそんなことに構って場合じゃない！！

必死に体をもがくけど、後ろ手に縛られた縄をほどけそうもない。足の方も同様だ。口には猿轡をはめられてる。

「ぶぶをうううう！！！」

「こら、大人しくしろ！？」

黒づくめのお兄さんにより、こんな身動きできない状態のあたしに更に拘束がかけられる。

大人2人がかりで押さえられたあたしがかなうはずもなく、しばらく暴れたのち諦めて力を抜く。

「ふう、やっと静かになったか」

と、彼らがどいた隙に、あたしは待ってましたとばかりに最大限に暴れまわった。

「ひゅぶぶぶぶいいいい！！！！！！！！」

ごろごろ床をのたうちまわって、とりあえず完全に力を抜いていたお兄さんAにアタック！！見事みぞおちにあたしのキックが入り、彼はそのままダウンする。

「おいお前！！」

慌ててBが、二度目の拘束をしようとあたしに襲い掛かるけど。

遅い！

あたしは素早くその状態で立ち上がると、思いっきり縛られた両足で飛び蹴りを喰らわせた。

「がぼっ！！」

こちらも見事、頭に命中し、Bはそのまま後ろに倒れ込む。あたしはすかさず頭を膝にくっつけると、飛び蹴りの反動で空中にぶっ飛んだあたしの頭が床にぶつからないよう、なんとか善処する。なんせ受け身が取れない状態なので。

運よく頭から落下せずに済んだけど、その代わり背中からもろにおちて衝撃を全て後ろで受ける羽目になった。

「！？」

鈍い痛みが背中一面に駆け廻る。痛い、痛い痛い、めちゃめちゃ痛い！！

けど、どうやら骨は損傷せずに済んだようで、しばらくすると痛み

もおさまって来た。まあ後で青あざにはなりそうだけど、仕方がない。

あたしは一息つくとき起き上がり、改めて周りを見渡した。

かなり広い部屋だ。大体20畳ほどはありそうな部屋。

内装はいたってシンプルで、大きなベッドとソファ、それから本棚があるのみ。後は何もない。殺風景にもほどがある。

だけど床にはふかふかな絨毯が敷かれているし、その家具も、細部にわたって細かい細工が施されているところからして、良質のものと見た。

というか。

そもそもここはどこなのか。

時を遡ると、あたしはいつものように自室のベッドに入り熟睡していた。当たり前だ。もう夜も深い時間帯だ。

草木も眠る丑三つ時、ふと目が覚めたのは、何かが侵入してきた気配がしたからだ。

で、気が付けば、あたしは誰かに口をふさがれ、手足を拘束され、とどめにみぞおちにパンチを喰らって気絶した。

それでさっき目が覚めたら、あたしは見知らぬこの部屋にいた訳だ。周囲を見ると、見覚えのない黒づくめの男（というか顔全体が隠れるマスクしてるんだから、見覚えも何もあつたもんじゃない）が2人、あたしの横に立っていたのだ。

おそらく彼らがあたしをこんな状態でどこかに運び出したのは間違いないんだけど…。

正直あたしには全く心当たりがない。あたしはこの街、ベイリンに出てきてまだ半年しか経っていない、天涯孤独の身。そんな短期間の間で恨まれる覚えはとんとなない。

とりあえず、ここがあたしの部屋じゃないことは確かなんだけど…。

ま、考えたって仕方ない。まずはこの手かせ足かせ口かせをどけるのが先だ。

何か助けになるものは…と周囲を見渡すと。

「あれ、あたしの刀！」

ベッドの上に見覚えのある色とシルエット。近づく、近づくと、やっぱり。

あたしの大事な刀ちゃんが無造作に置かれているではないか！！

なんでここに、とか、それはこの際どうでもいい。あたしは急いで近づく、じっとそれを見つめる。刀があるということは、刃さえ出ればこの忌々しい縄を切れると言う訳だ。

ならば簡単。

あたしはくるりとうしろを向くと、ありったけの力を振り絞ってなんとか手を動かすと、柄に触れる。それから留め金を外し、少しだけだけ刃を鞘から出すことに成功した。

よし、いけるぞ。あたしはその刃を自分の手の縄に当て、ゆっくりと上下に動かす。

やがて縄はぷつりという音を立てたかと思うと、するりと手が自由になった。

後はもう簡単。足の縄を刀で切断し、最後に口の猿轡をはずす。

「ふうう、ようやく解放された！…って、どんだけきつく縛ってたのよ。道理で痛かったはずだよ」

見ると、うつすら縄の跡が残っている。あたしは十代のか弱い乙女だって言うのに、将来まで残ったらどう責任とってくれるんだこんちくしょう！じろりと恨みを込めて倒れたまんまの男たちを睨みつける。

さて、まあこの人たちのことはおいといて。とにかく今はここから逃げるのが先決だろう。

と言っても、場所は不明だけど。ま、外に出たらわかるでしょう。外はまだ太陽は出ていなさげだし、そのことから考えてもあたしが気絶させられてからそれほど時間は経っていないはず。

そんな短期間で長距離を移動できるはずはないだろうから、おそろくベイリンのどこかなんだろうし。

そうと決まれば。あたしは、この部屋の唯一の出入り口であるドアへと駆け寄り、警戒しながら扉を開けようと…した瞬間、何の前触れもなくいきなりドアが開いた。

拉致された(2) (前書き)

王子はいじめっことです。

拉致された(2)

「!?!?!?!」

頭の中に星が舞う。一杯のお星様。なんてことはない、あたしは見事、勢いよく開いた扉に額を嫌というほど打ちつけたのだ。

そのまま不覚にも、後ろに倒れてしまった。

しかも、めっちゃ痛い。おでこがじんじんする。こりやあたんこぶもんだ。

「一体今日はなんて痛い目に遭う日なんだろう！ 厄日としか思えない。もう嫌、もう嫌、もう嫌……あ……、痛いっ……！」

あまりの痛さにそのまま床でごろごろ転がっていると、急に体が浮遊感に包まれた。天井向いてた視界が、90度直角に早変わり。もちろんあたしの力じゃない。

外部からの働き、つまり、誰かがあたしの体を起こしたのだ。そしてその誰か、なんて、どう考えたってドアを開けた張本人としか考えられない訳で。

「!？」

気が付けば、すぐ目の前に鳶色の瞳が迫っていた。というか、目しか見えない。ちよつと待って、この人が誰かとかそういう問題はこの際おいとして、その、この距離、近いんですけど。

だってあれだよ、相手の目しか見えない距離って、相当なものだよ？なんだ、これ、ちょっと照れるじゃないか。ってそんな場合じゃないぞあたし！

「あ、あの」

息もかかる距離だ。恥ずかしいけど勇気を振りしぼって声出すと、あたしの意志が伝わったのかすっと目が離れる。それに伴って視界が広がり、その人の全体像と、今のあたしの状況が把握できた。

今あたしは、鳶色の目をした男にがしりと頭を持たれ、じ————
————と見つめられた状態である。

しかもその男、なんというか、一言で言うと、その、怖い。

いやいや顔がとかじゃなくて、雰囲気。目はなんかいつちゃってるし、どこことなく邪悪なオーラが漂っている。どう見ても堅気じゃなくてその筋の人に見えるんだけど。服も髪も真っ黒だから、余計にあっち系に見える。

そんなお方が、

じー、じ————と、じ——
——と。

「………」

何も言わず、無表情のまま、ただ見つめてくる。正直怖い。

「あ、あの」

駄目だ、耐えられない。無言の空気に耐えられなくなり、あたしは沈黙を破ろうと声を出す。すると、今までまったく表情の動かなかった顔が、ピクリと動いた。

そしておもむろにあたしのおでこに手をやると、急に、すごく素敵な笑顔でにっこり笑った。

「!？」

よくよく見ればこの男、めっちゃめっちゃかわいいじゃないか。目がいつちゃってるのはともかく、少しクールだけど整った顔立ちだし、そのへんの奴じゃ比べ物にならないほどだ。

何、なに、なんなの!？ 思わずあたしは赤面して、男を見つめていた…のも束の間。

いきなり強烈な勢いででこピンしてきやがった。

「ばし————ン!!!!」

「だああああ!!!!!!」

一瞬であたしの頭は再び星でいっぱいになる、っていうか痛い痛い痛い!!!! だってそこ、その場所!!!! あたしがさっきドアに思いっきりぶつけた、たんこぶでかけの場所だって!!!!

しかもあの音、でこピンなんてレベルじゃない! 頭にバズーカ打ちつけられた気分! 思わずあたしは床で頭を押さえながら悶絶する。

なんなのこの男！あんな満面の笑みで無抵抗の人間の傷口に塩塗るような真似するなんて！！！！

意味がわからない！！！！！！

「っ：っちよつとあなた！！！！」

あたしは痛みから若干解放されるや否や、目の前に立つ男に詰め寄る。

「いきなり何するんですか！！めっちゃ痛いんですけど」

すると、その男は慌てる風もなく、あたしをじっと見つめ、やはり笑いを浮かべながら口を開いた。

「ああ、なんせそのたんこぶめがけて渾身の力で指をはじいたからな。痛いのは当たり前だろう」

「いじめっこですか、あなたいい年して！！」

いや、本当に痛かったんだから！！その証拠に、さっきまでは目立たないほどだったのに、今はぷっくり膨れているではないか。だって触ったらぼこっとしてるもん。

「あ、一応お前もちんくりんの身の上とはいえ、女なんだからもうちょっと色気のある声出せよ」

「色気も何もあんな強烈な攻撃喰らってるときにそんな声出せるか！？っていうかちんくりんは大きなお世話だ！！」

確かにあたしは背も小さいし、胸も、まあ、あれだし、色々あれだけども！！んなもん、あたしのせいじゃないし。放っといてくれ。

あたしはきつと睨みつけるけど、この男は全く堪えないようだ。余裕の表情でかわすと、懷から取り出したタバコに、優雅に火を付けた。

そしておもむろに、床に転がっている覆面野郎ズに目をやった。

「しかしあいつらも軟弱だな。手足縛った女にのされるとは。……こりゃあ意識戻ったら一から鍛えなおしだな」

「簡単に倒れてくれましたけど」

「ふん、あれでも俺の手駒の中では強い方なんだがな」

手駒。と、いうことは。やっぱりこの男はあいつらと同じ仲間、っていうより上司、主人。つまり。

「……あたしをここに連れてきたのは、あなたの指示ですか？」

すると彼はあっさり認めた。

「ああ、そうだ。俺があいつらに命じてお前をここまで運ばせた」

そう言って煙を天井に向かって吐きだす。

意味が分からない。どういうこと？あたしはこの男とは面識がない。こんな凶悪なやつ、知り合いにいる訳がない。

ま、分らないことは直接本人に聞くのが早いだろう。

本当はこの男を倒してさっさと外に逃げ出すのがいいんだろうけど。実はさっきから逃げ出す気配を窺ってはいるんだけど、この男、実に隙がない。

こんな一見飄々としてタバコなんて吸ってるのに、だ。ならば時間稼ぎに隙ができるまで、話を聞くのも悪くない。それに、理由もわからないままっていうのは寝覚めが悪い。

「一体、なんの理由があつてですか？」

あたしはそっと、後ろ手に隠した刀の鞘に手をかける。もちろん、いつでも切りかけられるようにだ。

が。男はそこでまた、にやりと笑った。

「んなもん、おお前を試したかったからに決まってるだろう？ テスタロッサ」

「ど、どうしてあたしの名前」

「それから、後ろに隠してる刀で切りかかって無駄だからな。お前の行動は全てお見通しだ」

「!？」

なんで、それを知ってるの？ そっちからあたしの後ろなんて見えなはずだし、音にも細心の注意を払ってたのに。

「なんで、って顔だな。まったく分かりやすい。他にも？ 色々知ってる。例えば、その刀はお前の亡くなった両親の形見だってこととか、それが両親の命を救ったとか」

あり得ない。だって、その話を知ってるのは、近所に住む若干ボケが進んでるおばあちゃん他数人だけ。その中にこの男の顔はない。だからそもそも見覚えのない顔だし。じゃあ彼らから話を聞いたってこと？

いやいや、だからといってここまでされる覚えはない。こうなりゃあ、逃げ出すとかそれよりも、はつきりしとかないといけない。

あたしは隠していた鞘から堂々と刃を抜くと、男の前で構える。ばれてしまった以上隠しとく意味もない。それにここまできたら、隙ができるのを待っとくなんて悠長なこと、言ってられない。

「あなた、一体誰なんです？それに試したかったって意味が分からないんですけど」

「いい度胸だな。この俺様に刀を向けるとは」

「いやだから何様だか殿さままだか分りませんが、知らないって言うてるでしょう」

「へえ、知らない、ねえ。本当に？」

「しつこいですよ。あなたみたいな性悪そうで偉そうな男、一回会ったら忘れるはずありませんし」

「偉そうは余計だ。俺は正真正銘偉いからな。なんてったって、この国の王族だ」

「………は」

王族？この男が？こんな悪役みたいな、タバコすばすば吸ってる人が？

「気付かなくても仕方ねえ。：じゃ、これなら分かるんじゃないかねえの？」

すると男はタバコの火を消すと、一度、顔を下に向けた。今から何が始まるっていうの？あたしはただ、黙ってその様子を見る。

やがてぱっと男が顔をあげた瞬間。

「こんにちは。僕のこと、本当に分からないの？」

あたしはその顔を、その声を聞いた瞬間、建物中が震撼するような声で絶叫した。

拉致された(3)

今にも風にとけそうな繊細で、それでいて柔らかな微笑みをたたえてあたしを見ているお方。

黒い髪が印象的な、国民ならほとんどが知っている程の有名人。

そのくせ病弱だから、滅多に公の場に顔を見せない。

そう、目の前にいたのは、紛れもない本物の、ガルダム国第6王子ゼイル様だったのだ。

彼は虫も殺さぬ優しい微笑みをたたえ、あたしを見ていた。もはやあたしの頭はパンク寸前だ。

「ななななななな、なんで、ゼイル王子?!?!?!」

「よかった、ちゃんと知ってくれたんだね。僕あんまりみんなの前に出ないから、顔も知られてないんじゃないかって思ってたんだ」

確かにお顔は滅多に拝めない。だけどなぜあたしが知ってるかと言うと、美形で有名な王子の肖像画やらなんやらが、国中で売られてポスターとして飾られてたりするから。

あれだけ街中で貼り出されてたら嫌でも目につくし、顔も覚えてしまうというもの。ちなみに密かにあたしもファンだったのだ。

そして笑顔で近寄ってくるのは、紛れもなくゼイル王子だ。さっきまでの凶悪で目つきがいつちゃってた奴の姿はどこにもない。

「あ、あの、その、本当にあなたはゼイル王子、なのですか……?」

？」

こんなことってあるのか？あの、鬼畜オーラ満開の男が、いきなりゼイル王子に早変わりって、いまだに信じられない。イリユージョンでも見せられた気分だ。

むしろ、夢だったんじゃないかって思えてくる。

あたしは思わず王子に駆け寄る。嫌だ、信じたくない！！だって王子は評判通りすごく美形でかつこよくて、優しくて、少し繊細で……って夢持ってたのに！

いや、何かの間違いだよね！？

すると彼は神々しいまでの王族スマイルであたしを見ると笑みを絶やさないままこう言った。

「ああ、だからそうだって言ってるだろうが。あんまりしつこいとミンチにするぞコラ」

脱兎のごとくあたしは素早く王子から離れる。この男、いや王子、そんな王子の顔でさりと怖いことをおっしゃる。

：間違いない、このお方は紛れもなくゼイル王子だ。

だけと言われてみれば、パーツは全て同じなのだ。

髪の色、瞳の色、鼻、唇、輪郭も。どうして気が付かなかったんだろう。

それだけ雰囲気さがらっと違ってることだ。気付かなくても無

理はない、と思う。

というか、なんだこの状況。もうあたしは何がなんだかよくわからなくなってきたぞ。つまり、あたしをさらったのはこのゼイル王子の差し金ってわけだ。

「ということは、ここはもしかしてお城、ですか？」

この人が王子で、調度品とか部屋の感じからして高級感がそこはかとなく漂う辺り、その辺の場所じゃないことは確か。すると王子は首を縦に振った。

「俺の部屋だ」

「……」

あたしはもう考えるのも邪魔くさくなり、っていうか色々ショックすぎて思わず床にへたり込む。

「それで、結局なんであたしをここに連れて来たんですか？」

とにかく理由を聞かないとい始まらない。

あたしは王子にそう尋ねる。もうどうにでもなれって感じ。何が来ても驚かない自信はある。すると王子はもとの凶悪顔に戻ると、にやりと笑った。

「単刀直入に言う。お前を『狂犬』に引き抜くために、ここまで連れてきた」

麗しの第6王子様

あの、恐怖の誘拐事件からもう1年。

あたしはゼイル王子に言われるがまま、狂犬の一員として日々を過ごしていた。

『狂犬』。

狂犬とは王様から直接指示を受け、秘密裏に王の命に従う、直属の秘密組織だ。

彼らの主な仕事は、警察でも解決できなかった未解決事件や、彼らが踏み込めない範囲まで手を広げ捜査を進めること。

そもそも、警察は事件の解決のために色々調査をするのだが、時折上からの圧力というものがかるらしい。特に大貴族が関わっていたり、王族の者が関係していると事の露呈を恐れたお偉いさん方が、それ以上捜査が進まないようににらみを利かせてくるのだそうだ。

刃向えばその者は潰され、場合によっては存在を消される。だからそれは未解決事件として扱われ、闇に葬られる。

そんな時に現れるのが、狂犬だ。

彼らはあらゆる非合法な手段を使って事件を調査し、秘密裏に関係者たちを始末し事件を解決するという恐るべき集団だという。

その存在は一切が謎に包まれており、本当に存在しているのかも定かではない。ガルダム王国の7不思議として語られる存在なのだ。

ちなみになぜ狂犬と呼ばれるかという、彼らは手段を選ばず、時に犯罪まがいなことを犯してまで罪を暴く。それも徹底的にだ。彼らの目にかけて逃れたものはなく、その執拗なまでの追いかけっぷりから、絶対に逃げられないもの、という意味で名付けられたらしい。

組織形態、人数、手段、全てが謎。もちろん国王はその存在を否定してるし、誰も見たことがないから表向きには伝説だ。

そんな生きる伝説の現在のボスであるわが主は今、ゼイル王子の仮面をかぶってご婦人を接客中である。

「それにしてもゼイル王子はなんて美しいのかしら！！」

頭をこれでもかって言うほど、無数の宝石と羽で天井に向かってデコレーションし、顔はしわを埋めるほどの厚塗りの白粉、唇には毒々しい紅色の輪郭を描き、肩の凝りそうなごての総レースのピンクドレスを年甲斐もなく見せつける女性。

彼の有名な五大貴族スネイク家の奥方、アパネル様その人である。

彼女は弱弱しい笑顔を見せる、外見は純粹、内面はどろどろまっくろすすまみれのゼイル王子にすっかり骨抜きにされたく、愛おしそうな目で彼の頬を撫でた。

「こんなにも美しいのにお身体が弱いだなんて。神様はいたずらだわ。おいたわしいですわゼイル王子」

「そんな、僕なんて……。アパネル様こそ、まぶしいほどの美しさです。その美しさに目が思わずくらんでしまいます」

目がくらむのは事実だ。っていうかあまりに痛々しすぎて直視できないってのが本音だろう。

「こうして夫人が僕のために、わざわざ貴重なお時間を割いてまで見舞いに来て頂いただけでも、僕の体は喜びに胸が震える思いです」
「まあ！！！」

子犬のような潤んだ瞳で、下から見つめる王子にやられてしまったのか、もう少女のような表情でぽーっと夫人は見つめる。

あたしの方はというと、あまりの臭い芝居っぷりに直視できず、思わず目を背ける。

だってそうでしょう。誰が腹黒鬼畜王子（顔はいいが）と熟年厚化粧少女趣味貴族との生ぬるいラブシーンを見せられて喜ぶものか。

その間にも2人のラブシーンは進行していた。うん、いや、あたしは何も聞こえない、何も見ていない、絶対に！！

とりあえず、それから10分ほど寒いシーンが続いたようで（あたしはその間ずっと窓の外を見ていた）、ようやく夫人が重い腰をあげた。

「では王子、私はそろそろ参りますわ」

「ええ、名残惜しいですが…。また是非いらしてください。体調が万全でしたら、今度はもっとたくさんお話ししましょう」

そしてとどめとばかりに、王子ははにかむような笑顔でにっこりほほ笑んだ。

夫人はくらりと体をよろめかすと、そのままの状態部屋から去った。

そして人の気配が完全に消えた次の瞬間。

「つたく、俺は暇じゃねえんだよ」

あたしのもっとも見慣れたゼイル魔王閣下に戻られたご主人様は、苛立たしげにタバコを取り出すと火を付けた。

「病弱な薄幸の美青年の王子の役も、楽じゃねえな」

「そしてそんな見かけ倒しのゼイル王子と往年の女性との愛のシーンを見せられる従者の方も、精神的に楽じゃありませんけど」

「お前は別にいいだろうが。だってMだろ？精神的苦痛も肉体的苦痛も全て快楽に変えるっていう…」

「人を勝手にそんなキャラに位置付けないでください！！！」

はあ。なんであたしはこんな男の下についてるんだ？今更ながら謎だ。

麗しの狂犬王子様

ガルダム王国第6王子ゼイルといえば、病弱で儂げ、そして世にも美しい繊細な王子として有名だ。

漆黒の髪はどこか愁いを帯び、鳶色で切れ長の瞳はどことなく哀愁を漂わせ。病気にも負けないその健気さからくる笑顔に、女性たちはみな虜だ。だがその体の弱さゆえ、滅多に国政には顔を見せず、国民の間では麗しの幻影王子ともてはやされている。

が。本来の彼の姿は、こっちなのだ。病弱な第6王子は仮のお姿。裏の顔は最強の名を持つ狂犬のボスだ。

さっきまでの可憐な姿とは一変。纏っていた淡い月光のような儂さは身をひそめ、ドSでニヒルな笑みを浮かべながら愛用のタバコを吸いまくり、凶悪な目つきで鋭く相手を見つめ、徹底的に獲物（犯人）を追い詰める。

そして味方を川に突き落とすことすら厭わない、最凶最悪の魔王みたいな男…。

それがあたしの主、ゼイル王子の本性である。

あの日、ここに連れ去られた私はこのヤニ王子のお眼鏡にかなったらしい。

どうやら、街で出会ったチンピラ達を成敗していた場面をどこぞでたまたま見かけて、で、それからあたしのことを調べ上げて、実際実力をためしてみようということで部下に襲わせて、なんて物騒な事しかけてきたみたいなんだけど。

そのまま私は王子と無理やり雇用契約を結ばされた。

だって断れば国家への反逆者としてみなす、なんて恐ろしいこと言ってくるんだよ、この人！狂犬の秘密を知られた以上、生かしてはおけないって。自分でぺらぺらしゃべってきたくせに！

私もまだ10代で死にたくはないので、この契約を結んだ。

まあこの仕事、さすがは王直属の機関だけあって、給料は半端な
くいい。

王都に来たものの、日雇いの仕事しかなかったから（腕には自信があったのに、女だからってどこも雇ってくれなかったのだ！）、日々の生活の心配をしなくて済むのはありがたいことだけど。

ただ、休みがあんまりとれないのと、王子の侍女として働くっていう精神的苦痛が伴うのはいかなものかと。特に後者。

なんであたしなんだ。もっと他の、可愛い子とかのほうがよくないですか？自分の侍女は、ってこの前聞いたんだけど、ゼイル王子は首を横に振った。

自分に夢持ってる女の子の夢を壊すなんて、僕にはできない…！！
なんてほざいてたけど。確かに。

まさかあのゼイル王子がこんな凶悪王子だなんて知った日には、みんなショックで卒倒するんじゃないだろうか。あたしだって相当ショックだったんだから。

はっきり言って傷ついたあたしの心の慰謝料も払ってほしいぐらい

だよ！このペテン王子め！じとーっと見てみると、視線に気付いた王子が女の子を蕩けさせる極上のスマイルでにっこりほほ笑んだ。

「どうしたのかな、テストロッサ。そんなに僕のこと見つめてきて」「いやいや見つめてないです気のせいです」

うゝ、やばいと思った時にはもう遅かった。そのうつとりさせる笑顔を一瞬たりとも崩さずに、あたしの方へ歩み寄ってくる。本性を知ってるからこそ、余計に怖い怖い怖い…。

しかも、普段はテストロッサなんて呼びにくいからテイ、って呼ぶのに、ここであえてテストロッサ呼び。正直嫌な予感しかない。

気付けば壁際に押しやられてた。やば、逃げ道がない。

「あの、なんでこんな近くに来るんですか！？」

「だって、君が何か言いたそうな顔をしていたから。ほら、部下の話をきちんと聞くのも上司としての役目でしょう？」

にしたって近いって！なにこの距離！文字通り目と鼻の先！これが出会う前の王子だったらドキドキするけど、今は別の意味でドキドキだよ！背中冷や汗が流れる。

「…もしも今、誰かが入ってきてこの場面を見られたら、どうなると思うか？」

急に腰にくるバリトン声で、耳元で囁かれ、恐怖で思わずへたり込みそうになる。

「ひっ！！」

が、主は許してくれない。がしつと腕を掴むと、壁にあたしの体を固定し、艶やかな笑顔を浮かべた。

「城中に、俺付きの侍女とそういう関係になると知れ渡る。話を聞いた貴族の娘や女たちが、お前にどういう対応をするか…。想像に難くない」

王子はご自分の人気ぶりをそりゃあもうよくご存じだ。間違いない、そうなればあたしは王子に虜になってる全てのお姉さま方にハブられ…っていうかそれ以上の危険が…!!

だめだ、想像しただけで血の気がよだつ。女の方が陰湿なのだ、嫌がらせの類と言うのは。ただでさえ、ぽつとでのあたしがいきなりゼイル王子の侍女になって、仲間からは冷たい待遇されてるのに、これ以上針のむしろになるのはまっぴらごめんだ。

しかもそういうことになったからと言って、この王子があたしを侍女業務から解放する訳がない。むしろいたぶられたあたしを間近に見ながら楽しむタイプだ。

「で？今お前、何を考えてた」

「……いいえ、王子はとても素晴らしくて素敵だなああああと見惚れておりましたあ!!」

心の中で思うのも許してくれないのかこの王子はあ!!!!
あたしの答えを聞くと、王子は満足気に頷き、ようやくあたしは解放された。

ふう、命拾いした…。

正直、本性丸出しのチンピラ姿よりも、王子の仮面をかぶったキラ
キラスマイルで来られる方が余程心臓に悪い。

狂犬王子の片腕王子（1）

あたしをいたぶって満足したのか、王子は元の悪人顔に戻ると再びタバコに火をつける。

どうでもいいけどこの人、吸いすぎだよ。一日20本はいつてる気がする。

「ところで伯爵に薬を売った黒幕ってまだ見つかってないんですよ？」

「ああ、あの変態野郎も、詳しくは知らないらしい。実際に取引したのは下っ端の奴みたいだし、…王様にはああ言ったが、実際のところ時間はかかるだろうよ」

ちなみに、今あたしたち狂犬の抱えている仕事は、『麻薬捜査』。

ガルダム国内では今、これが大流行しているのだ。通称『白い悪魔』。これを摂取すると、なにかが異常に分泌されて、疲れにくくなつて寝なくても大丈夫になるらしい。気分もハイになって、その、性的快楽を感じやすくなる。

あまりにもその被害が拡大していて、止めようにも止められない状況。とにかくそれを持ち込んだ黒幕を捕まえないことには被害はおさまらない。

で、調べていった先にあの、変態伯爵の名前が挙がって来たのだ。彼はいわゆる「売人」の方。

伯爵家は借金を抱えていて生活に苦勞していたはずなのに、いつの

まにか綺麗さっぱり完済、それどころか家を増改築して羽振りのいい生活をしてたんだとか。

そのあまりの変貌ぶりを不審に思っただけで調査したら、どうやらどこからか手にした薬を売りさばくことで資金を調達していたと。

でもまあ、と王子は言葉を切ると、

「今リ्यूクに調べさせてるから、もう少し時間がかけられるなら辿れるだろう」

リ्यूク、とは、狂犬のメンバーで、主に情報収集の方面で活躍している。その能力はピカイチで、ゼイル王子が最も信頼するメンバーの一人だとか。それはそうだろうさ。生まれたときからの付き合いで、お互いにお互いをよく分かりあえてるらしいし。実際2人はめっちゃめっちゃ仲がいい。

その時。

扉がノックされる音がした。

「ゼイル、ご機嫌はいかが？」

穏やかなその声に、あたしはすぐに扉を開けに走る。この声は…

果たして。目の前にいたのは、やっぱり予想通りのお方だった。

「テイちゃん、こんにちは」

一寸の曇りもない爽やかな笑顔をあたしに向けたのは、この国の第

7王子。

輝かしい金色の髪と暖かみのあるのオレンジの澄んだ瞳、見た人を虜にさせる太陽のような笑顔を浮かべたこの方。

「リユート王子!!」

今まさに話に出てきた御仁の姿がそこにはあった。

確かにこの仕事は辛いけど、その中にはちょっとした楽しみと言うか息抜きもあって。

それが、リユート王子に会えるってこと。

彼もこの国ではとても有名なお方。

第7王子リユーク様と言えば、第6王子であるゼイル様と同じぐらい、婦女子たちから人気が高い。

リユーク王子は、例えるなら太陽のような存在。ぱっと周りを明るくさせる笑顔と全てを包んでくれそうなオーラを持っていて、おまけにこれまた美形。

なんだけど、すごく人懐っこくて、大柄な方なのにその言動や仕草が可愛らしい。

ゼイル様が、まさしく黒い狂犬だとしたら、リユーク王子は大型犬。イメージはゴールデンレトリバー。

しかもすごく優しく、お城の侍女や兵士たちにも気さくに声をかけてくださる。もちろん、あたしにも。会話してるとなんか和むんだよね。普段虐げられてるからかもしれないから、余計に。

「これ、よかったら食べて」

そう言って差し出されたのは、なぜか食べごろ色に染まったみかん。

「えっと、その、どうされたんですか？」

「母さんの実家の庭の木になってたから。おいしそうだし、ティちゃん喜ぶかなあって」

そう言って嬉しそうに笑う王子に、あたしの胸はきゅんとなる。

何この王子、あたしよりも年上だとは思えないぐらい、可愛いんですけど！？

「もちろん嬉しいですよ！！ありがとうございます！！」

あたしは嬉々として受け取ると、なるべく潰れないように注意してポケットにしまう。あとで食べようっと。

「おい、俺より先にティに手土産やるなんて、いい度胸してんなお前」

背後から飛んできたのは、作ってないご主人様の声。もちろんリュート王子は驚かない。長年の付き合いなので、ゼイル王子の本性はずいぶん前からお見通しなのだ。

「そりゃあ可愛い女の子からプレゼントをあげるのが、紳士としては常識でしょう？」

か、可愛いって……！？お世辞だって分かっても、こんな素敵王子に言われたら照れる！！恥ずかしい！！しかもリュート様はゼイル

様と違って裏の性格とか本性とかないから余計に！

「で、俺の分は？」

「ゼイルにはないよ。これはテイちゃんへのお土産なんだから」

そう言うってから、煙をふかしているゼイル王子を見て片眉をひそめる。

「またそんなもの吸って！あんまり吸いすぎると、肺が真っ黒になって、将来病気になる可能性が高いんだから！何回言ってもゼイルは聞かないよね」

「別にいいだろう。どうせ表向きは俺、病気がちなんだし」

「実際はぴんぴんした健康体でしょう？ いいかい、君のためを思っ
て言ってるんだから。」

後で後悔したって遅いんだし」

「会う度に小言ばかり言いやがって。お前は俺の母親か」

「いいえ、僕は君の弟です」

威張るセリフでもないのに、なぜか胸を張って誇らしげに答えるリ
ュート様。

さすがのゼイル王子も、第7王子には敵わないらしい。しぶしぶつ
けたばかりの火を消す羽目になる。

ここには他にも何人もの王子王女の方々がいるんだけど、ここまで
ゼイル王子が親密な関係を築いているのはリュート様だけだ。

って、そもそもゼイル様の裏の顔と本性を知ってるのも、リュート
様と後は、王様ぐらい。

確かに、ゼイル様が毒気を抜かれるのも分かる。そういった魅力が

リ
ユ
ー
ト
様
に
は
あ
る
も
ん
ね
。

狂犬王子の片腕王子(2)

「あ、みかんはないけど…君へのお土産は、こっち」

そう言って、リュート王子はゼイル様の方へ歩いていく。手にしているのは白い紙。

「さすがの僕も、ちょっと手こずっていてね。黒幕まで辿り着けてはいないんだけど…」

ゼイル王子はそれを受け取ると、険しい顔つきでざっと目を通す。

それにしても、まさかリューク王子まで狂犬のメンバーだったっていうのにはびっくりした。その外見からは、そんな凶暴な裏組織に入っているようには見えないから。

でも人のよさそうなこの王子、実はかなりのやり手。

そもそもこの麻薬事件は、国家警察が追っていたヤマだった。捜査するうちにドミンゴ伯爵が絡んでるっていうことは分かったんだけど、相手はお貴族様。やっぱりというべきか、謎の圧力がかかって捜査が打ち切りになったそう。

困った国家警察のトップが、その旨を王様に伝えて、あたしたち狂犬の担当になった。

それからあたしたちはその日の午後早速伯爵家に殴りこみ、証拠品を見つけ、彼を尋問。で、今日がその尋問から3日目なんだけど…。

警察も、ドミング伯爵の名前までしか分からなかったというのに、リユート王子、わずか3日で他にも関係してそうな貴族様達の名前を調べ上げた。

今ゼイル王子が手にしているのが、その方々の名前の載ったリスト。横目で盗み見ると、他にも色々な事が書いてあるし。各家の総資産、負債額、それらの返済日、その後の状況など…。

よく短期間で調べられたなってぐらい。しかもリユート王子、狂犬以外にも政務を抱えていてそれなりに忙しいはずなのに、そっちもきちんとこなしつつ、らしいから。

見た目はこんな、おっきいワンちゃんみたいな方なのに、迅速に膨大な仕事量をこなせるのはさすがは狂犬のナンバー2と言うべきか。

「ドミング伯爵の他にも、ソンブルク伯爵にゴードン伯爵、それに名だたる貴族の名前も…。どいつもこいつも、借金で首が回らなくなったやつらばかりだな。これだけの相手を手玉に取るやつらか。どうやら背後の黒幕はかなり大きいものと考えていいだろう」

「それで一番怪しいのは、一番上に名前のあるゴードン伯爵かな。彼のところが、一番初めに借金を完済して羽振りが良くなったみたいだし。それに、ドミング氏もゴードンの紹介で始めたと言言してる。他の貴族たちにも尋問をかけてるけど、彼らも同様にゴードンの名前を挙げてる」

「ゴードンか。かなりの大物だな。接触はあったのか？麻薬商人とは」

「3日間付きっきりで尾行してるけどさっぱり」

だけど、そう言葉を切ると、リユート王子の手には新たな書類の束

が。

あれ、一体どこから出したんだろう。だってさっきまで何も持ってなかったよね？

あたしの心のツツコミをよそに、ゼイル王子は特に何も言わずそれを受け取る。

そうですよね、今はそんな話す状況じゃないですもんね。

「それは彼が個人的に親しくしてる、商人の名前。この中に密売の斡旋者がいるはず」

「なるほどな、それならゴードンが麻薬密売貴族の草分け的存在でも納得できる」

：何かなるほどなんだろう。2人の中では点と点が線につながってる状況なんだろうけど、あたしは正直意味不明。点と点が空間の中でぽつんと浮いてる。

ゴードン伯爵と仲のいい商人の中に、なんで麻薬密売に関係してる人がいるって分かるの？

それに、それなら伯爵が麻薬密売の貴族の第一人者っていうのも納得できる、って、どういうことですかい????

あたしがいない頭を必死に絞ってると、王子たちの声が飛んできた。

「テイちゃんが、すごく面白い顔になってるね」

「……お前はほんとに顔に出る女だな」

「え、出てます？顔に？」

全く分かりませんって？だって実際分かんないんだもん。

別にあたしが分からなくなたって、狂犬の1，2が分かればそれでいいと思うんだけどさ。

同じ空間にいながら除け者にされてるみたいで悲しい。いや、自分が話についてけないおバカだって認めるのが悔しいだけかもしれないけど。

あたしがそりゃあもう分からないので教えてくださいな目を2人に向けると、一人は頭を抱えた。

はい、そうですよねえ。めんどくさそうな顔を目撃した瞬間から、ゼイル様にお教えいただけるとは期待しておりませんでした。

ので、もう一人の方をじっと見る。この方は先の御仁と違って心が広いので、教えてくれるみたいだ。

わあい、さすがリユート王子。

ゼイル様と血が繋がってるとは思えないほど、お優しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5749z/>

狂犬王子にお仕えしています。

2011年12月24日00時51分発行